

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007 年度～2009 年度

課題番号：19320116

研究課題名（和文）古代地中海世界における規範と公共性の比較文化史的研究

研究課題名（英文）Comparative Studies on Norms and the Public in the Ancient Mediterranean World

研究代表者

桜井 万里子 (SAKURAI MARIKO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：90011329

研究成果の概要（和文）：古代ギリシア世界、とりわけポリス市民共同体において、前古典期までに成立、発展してきた社会規範と公共性概念に関して、その歴史的発展の様相を明らかにするとともに、古典期におけるそれらのあり方、とりわけ公的領域と私的領域の関係性を、法や宗教など諸側面から浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：This research project reveals how social norms and the public sphere in the Greek world, especially in the world of *poleis*, were taking distinct shape in the archaic period, and illuminates some of the ways that the public and the private spheres in classical Greece were mutually implicated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2008 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
総計	13,100,000	3,930,000	17,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：地中海世界、ギリシア、公共圏、規範、宗教、碑文、法、

1. 研究開始当初の背景

冷戦構造崩壊後、19世紀的な国民国家が相対的に意味を低下させ、国家と個人、公と私との関係性のあり方が大きく変動しつつある。このような状況下において、国民国家を超える新たな公共性概念の構築が切実に求められていると言えよう。官僚制とテクノクラシーの発達は、投票行動以外の政治への参加を疎遠なものにし、既存の制度化された公共性に対する市民の信頼を大きく揺さぶるに至った。このような事態に対する反省から、本研究は、西欧型市民社会の原型であるポリス社会の直接民主政が、無秩序に傾かず、また専制支配者に依存することなく、どのようにして自律的な規範と公共性意識を獲得したのか、またそれがその後の地中海世界と西欧文明にどのように受け継がれていった

かという課題を、地域・時代横断的な比較文化史的観点から、政治史・制度史・社会史・文学など多角的なディシプリンによって解明しようと試みる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、西欧型民主主義の源流である古代ギリシアのポリス社会において公共性の概念がどのように発生し、それが古代地中海世界全般においてどのような歴史的展開を見せたか、そしてこのような古典的公共性概念が、のちに西欧市民社会の規範意識にどのように影響したかを探究することにある。

具体的には以下の3つの問題を解明する。

(1)「ポリスにおける規範意識の発生」：ポリス社会において市民が従うべき公共的

な規範というものが、どのような歴史的背景から発生したのか。とくに、成文法が初めて制定された前7世紀において、慣習的な規範意識が成文法によってどの程度取って代わられたのかを解明する。(2)「ポリス公共圏の構造の解明」:古典期に成立した民主政社会において、公と私という二つの領域は、互いにどのような関係性をもって成立していたか。ポリスの公共圏は、どのような規範意識に支えられていたのか。

(3)「古代地中海世界におけるギリシアの公共性の歴史的展開」:そのようにしてギリシアのポリスに成立した公共性という概念は、ヘレニズム時代、ローマ時代にどのような形で継承されていったか。そしてその遺産の継承が、その後の西欧世界にどのような影響を与えて今日に至っているか。

3. 研究の方法

まずは本研究課題に必要な基本史料を揃え、同時に、研究の現状を掌握するため、関連文献の収集を行い、先行研究の調査を行う。また、以下に述べるように役割分担を行い、それぞれの側面から研究を進めるとともに、年に1~数度、全員参加の研究会を開催する。研究会では、個々の研究状況についての新知見を共有し、また、相互の研究を照合することで、各自のアプローチの仕方を検討する。

研究分担は、以下の通りを行う。研究代表者桜井は、アテナイの公領域がデーモシオスとコイノスの二相からなるとの仮説<二相の《公》理論>を導き出すに当たり、歴史叙述や法廷弁論、プラトンを中心とする哲学的著作も史料として使用してきた。今回はこれらの古典文献を渉猟し、デーモシオスとコイノス、両語の用例を収集、分析するとともに、市民と非市民(外国人、在留外国人、女性)のコイノス領域への関与の仕方について、どのような差異があるか、具体的に明らかにする。同時に、宗教面、とりわけ秘儀やオルフェウス教といった特定の祭祀から、公共性概念について考察を加える

研究分担者逸身は、アルカイック期にさかのぼって、古代ギリシア文学に登場する規範意識と公共性概念をテキスト分析によって抽出し、その歴史的変容を探究する。

橋場は、主としてアテナイ民主政の諸制度の生成と発展とを国制史の分野においてあつげ、民主政の諸制度の背景に隠れている公共性概念を抽出しようと試みる。そのために、前7世紀以来行われて来た法の成文化の過程にそって碑文・古典史料双方に記録された法および法規を網羅的に収集することが必要である。また同時に、心性史研究の潮流をあつげる。

師尾は、主としてポリス世界における碑文にあらわれた書承文化を、通時的視点から分

析することによって、ポリスの規範と公共性概念の生成と変容をたどる。同時に、基礎的作業として、具体的な碑文の年代決定に関する分析も行わなければならない。

長谷川は、ギリシア古典期に成立した公共性概念が、①アテナイ以外ではどのような状況にあったのか、②ヘレニズム世界とローマ世界にどのように継承されていったのか、それがその後の西欧文明にどのような影響を与えていったかを考察する。①に関しては、具体的な事例としてスパルタ、メガロポリスを対象とする。②に関してはポリス衰退論の是非との関係から考察を加える。

佐藤は、法と社会の関わりにおいて、国家による法と社会的規範、あるいは(ハーバマスの意味での)公共圏について考察するため、主に法廷弁論を用いる。法廷弁論から得られる、司法制度と実践、そしてこれに対する世論の関係を検討することで、民主政期アテナイの「公共」のあり方について検討を加える。

さらに研究代表者、分担者はそれぞれ、短期間の渡欧を通じて欧米の研究者と意見交換を行い、さらに毎年、1~数名の欧米の研究者を招聘してワークショップを開催する。2008年度末には、欧州から8名程度の研究者を招聘し、また本研究課題の参加メンバーを軸として、大規模な国際コロキウムを開催する。こうした欧米の研究者との意見交換を通じて、研究の視角、方法論について、独創性と確実性を確認するとともに、多角的観点から課題の解明にむけた学術的フィードバックを得る。

4. 研究成果

研究代表者桜井は、公共圏に関して言及のある文献史料を渉猟し、これに加えて碑文やパピルス进行分析することで、古代地中海世界における公共性と規範について、宗教的側面から検討を加えた。また市民と非市民が、アテナイをはじめとするポリス的公共性とそれぞれいかに関わりを持ったのか、その多層性、柔軟性を一部解明することができた。なかでも、ポリス的宗教と密儀的宗教における市民、非市民の参加のあり方を通じて、ポリス共同体的な公のあり方が柔軟であり、二相の《公》があることを指摘した。

とりわけ宗教的側面に関連しては、2009年3月に来日した Catherine Morgan 教授 (British School at Athens)、Hugh Bowden 博士 (London 大学 King's college)、2010年に来日した Irene Polinskaya 博士 (London 大学 King's college) らが、公と私の二対立が単純ではなく、複層的であり、通時的に変容もする点を明らかにした。さらに彼らによって、デーモシオスとコイノスという「二相の《公》理論」についても宗教的側面から確

認、補強された。その一部は翻訳の形で公開している。

研究分担者逸身は、ホメロス以来の伝統であるギリシアの韻文について、これを披露する「場」の問題、ジャンル意識の生成と変容の問題から、公共性概念について検討を加えた。とりわけ古代ギリシアの韻文が、公的・私的なパフォーマンスとして披露され、その区分が韻文のジャンル意識の明瞭化と密接に結びついていたことを指摘した。

橋場は、主としてアテナイ民主政の諸制度の生成と発展をあとづけ、民主政の諸制度の背景に隠れている公共性概念を抽出しようと試み、単著及びいくつかの論文を公刊した。主たる成果としては、前古典期から前5世紀のアテナイにおける「贈収賄」関連法について、公と私の問題を扱った。佐藤は、古典期アテナイにおいて、訴訟制度（「公」）が目的とは異なった形で利用されている実態と、それに対して形成された世論（ハーバマスの「公共圏」からの対応）について分析を加え、当該社会の「公」のあり方の複層性について指摘した。これは「二相の《公》理論」を補強する結論を導いた。

師尾は、ポリス世界における碑文に現れた書承文化を、発生時期からヘレニズム時代まで通時的にたどり、その性格を分析した。とりわけ石碑に名を刻むという行為と市民アイデンティティの関わりについて分析し、さらに奉納行為によって関連づけられるオイコス（家）とポリスとの関係を分析した。公私の分離発生を碑文文化について指摘したのは、学問上の重要な貢献である。オイコスとポリスの公私の関係に関しては、2007年に招聘した Hans van Wees 教授（ロンドン大学 UCL）、2009年に招聘した John K. Davies 名誉教授（Liverpool 大学）がそれぞれ、前古典期、古典期のアテナイに関して、その発生と変容に関して独自の論を展開し、理解の幅を広げることができた。

長谷川は、①とりわけスパルタというポリスに着目し、その公共性について考察を加え、これが特殊例ではなく、他のポリスと共通する部分を有することを指摘した。また②ヘレニズム、ローマ時代に公共性概念が、どのように継承されていったのか、それがその後の西欧文明にどのような影響を与えていったかを考察した。2009年に招聘した Henk Singor 博士（Leiden 大学）は古典期スパルタについて、A. Rizakis 教授（KERA, Athens）はローマ時代のギリシアについて、C. Rouche 教授（London 大学 King's college）は古代末期アフロディシアスについて、公と私の多様性と変容・継続について指摘し、研究の視角を広げた。

以上の研究を踏まえ、研究代表者が、特にアテナイ民主政と公共性の関わりについて、

総括的な研究報告を行った。ただし、本研究課題のメンバーの間でも、次々に多様な研究成果が出されたため、全体を最終的に総括するには至っておらず、これは下に記す英文図書への公刊を機に、発表することとしたい。

研究代表者及び分担者による個々の研究は、古代ギリシアにおける公共概念の発生、歴史的展開、公共性の複層性、とりわけ「二相の《公》理論」の射程と限界について、多面的に明らかに、学問上、国際的にも極めてオリジナリティの高い貢献をしている。そのことは、2009年3月27日から29日にかけて、多くの外国人研究者を招いて開催した第2回日欧古代地中海世界コロキウムでも確認された。同時に、招聘した欧米の研究者たちが提供した知見により、議論が補強されたことは言うまでもない。

研究成果は、主に国内外の学会及び研究会で口頭報告の形式で行われ、さらに様々なフィードバックを受けた上で、専門の雑誌論文、論文集の形で公刊された。同時に、アウトリーチとして、比較的一般の読者を想定した著書も複数刊行し（図書(2), (4), (5)）、ここにも今回の研究の成果を盛り込むことができた。

今後の展開として、まず第一に挙げるべきは、コロキウムを中心とした学術的成果を、英文図書の形で公刊することである。これに関しては、本課題の研究代表者、分担者に加え、その他のコロキウム参加者による原稿が既に準備されており、公刊に向けた準備が進められている。また、今回の研究成果は、公共性を二項対立的に理解する近代的価値観に対して、異議申し立てをするものにもなっており、他分野との連携を通じて、より広く成果を還元していく必要がある。具体的には、近代における《公共圏》の発達を議論する近代史や社会学との連携が考えられる。またアウトリーチ活動として、法律や公的制度の外側で機能する社会規範や社会行動について関心を抱く、より多くの人々に向けて、啓蒙書（関連図書の翻訳を含む）を公刊していくことになろう。本研究課題の成果をより深化させるためにも、参加メンバーの各自が、専門研究を継続して行うことは言うまでもない。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計24件）

(1) 桜井万里子「メネステウスとメネダイオスーベンディス祭祀のアテナイ到来について」大芝芳弘・小池登編『西洋古典学の明日へ』知泉書館、査読有、2010年、281-291頁

(2) 桜井万里子「オルフェウスの秘儀と古典期のアテナイ—デルヴェニ・パピルス文書を手掛かりに—」『西洋古典学研究』58、査読有、2010年、1-11頁

(3) 桜井万里子「エレウシスの秘儀とオルフェウスの秘儀—古代ギリシアにおける二つの秘儀」深沢克己・桜井万里子編『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史』東大出版会、査読有、2010年、33-67頁

(4) 桜井万里子「古代ギリシアの社会をジェンダーの視点から読み解いてみる」、『学術の動向』2010-5、査読無、2010年、62-63頁

(5) 橋場弦「アテナイ民主政の警察と市民」吉田伸之、伊藤毅編『伝統都市2—権力とヘゲモニー』東京大学出版会、査読無、2010年、101-124頁

(6) 橋場弦「二つのアンビヴァレンス—贈与と異民族を巡る意識変容」桜井万里子、師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム』山川出版社、査読無、2010年、228-251頁

(7) 師尾晶子「文字と社会」『西洋古典学研究』58、査読有、2010年、95-102頁

(8) Akiko MOROO, “How Did People Enjoy Epigraphic Culture in Ancient Greece? Inscribing Names on Monuments”, *Proceedings for ICANAS (International Congress for North African and Asian Studies (Sep. 10-15 2007))* (accepted in 02/2008, forthcoming)、査読無、2010年、(掲載決定、頁未定)

(9) 長谷川岳男「ローマ帝国を捉え直す—古代と現代の対話—」『歴史地理研究』756、査読無、2010年、10-17頁

(10) 長谷川岳男「古典期スパルタにおける公と私—ポリス論再考—」『西洋古典学研究』58、査読有、2010年、12-24頁

(11) 佐藤昇「ヒュポモシアー—デーモステネース 18 番 103 節の解釈をめぐって」大芝芳弘、小池登編『西洋古典学の明日へ』知泉書館、査読有、2010年、311-332頁

(12) 佐藤昇「古典期アテナイの国内情勢と外部接触—当番評議員とアテナイの外部接触に関する—考察」桜井万里子、師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム』、山川出版社、査読無、2010年、252-273頁

(13) Noboru SATO “Religious and Political

Trial: Another Aspect of Anytus’ Prosecution against Socrates”, *KODAI: Journal of Ancient History* 15/16、査読有、2010年、25-40頁

(14) 佐藤昇「アイリン・ポリンスカヤ「共通聖域と他所（よそ）の神々：ヘロドトス 8 卷 144 節における「共通」の意味に関する覚書」『クリオ』24、査読有、2010年、53-74頁

(15) 橋場弦・師尾晶子・長谷川岳男「ギリシアの「衰退」とは何か」『西洋史学』234、査読有、2009年、50-60頁

(16) 師尾晶子「書評：伊藤正著「初期ギリシア土地制度理解のための—考察—共有地から公有地へ」（西洋史学論集（九州大学）第 45 号所収）」『法制史研究』58、査読無、2009年、395-397頁

(17) 師尾晶子「古代ギリシアの石碑—関係性の記録と記憶の共有」『歴史学研究』859、査読有、2009年、144-152頁

(18) 桜井万里子「古代ギリシアの海港ペライエウスにおける異文化接触」『古代・中世・近現代ヨーロッパ港湾都市の空間構成と社会動態に関する比較史的研究』（基盤研究(B) 報告書）(研究代表者：大津留厚)、査読無、2008年、77-85頁

(19) Mariko SAKURAI, “The Thesmophoria and marital institutions in democratic Athens”, *MIKPOS IEPOMNHM QN ME A E T E S E I S MNHMHN MICHAEL JAMESON*, 査読有、2008年、41-51頁

(20) 長谷川岳男「メガロポリスの成立—ポリス再考序論」豊田浩志編『神は細部に宿り給う—上智大学西洋古代史の20年』（南窓社）、(査読無)、2008年、43-63頁

(21) 桜井万里子「空間構造に見るアテナイ民主制成立の背景」『史境』54、査読有、2007年、1-14頁

(22) 桜井万里子「古代ギリシア史研究の意義」『史海』54、査読有、2007年、14-23頁

(23) 逸見喜一郎「教訓詩人個人々の系譜的自己規定、ないしジャンル意識」『西洋古典学研究』56、査読有、2007年、1-13頁

(24) Akiko MOROO “The Parthenon Inventories and Literate Aspects of the Athenian Society in the Fifth Century

BCE”, *KODAI: Journal of Ancient History* 13/14、査読有、2007年、61-72頁

〔学会発表〕(計15件)

(1) Mariko SAKURAI “The Date of IG I(3) 136 and the Cults of Bendis in Athens in the Fifth Century”, Conference in Honour of Prof. H. B. Mattingly: The Athenian Empire: Old and New Problems, 2010年5月22日、British School at Athens (アテネ、ギリシア)

(2) Akiko MOROO “Three Mysterious Inscriptions Concerning Erythrai”, Conference in Honour of Prof. H. B. Mattingly: The Athenian Empire: Old and New Problems, 2010年5月22日、British School at Athens (アテネ、ギリシア)

(3) 長谷川岳男、「エトノス・シュノイキスモス・ポリス-ギリシア人コミュニティのダイナミズム-」日本西洋史学会第60回大会、2010年5月30日、別府大学

(4) 桜井万里子「古代ギリシアの社会をジェンダーの視点から読み解いてみる」日本学術会議とジェンダー史学会等との共催シンポジウム、2009年12月13日、日本学術会議

(5) 桜井万里子「オルフェウスの秘儀とアテナイ-デルヴェニ・パピルス文書を手掛かりに」日本西洋古典学会第60回大会、2009年6月7日、一橋大学

(6) 師尾晶子、「古代ギリシアの石碑-関係性の記録と記憶の共有」、2009年度歴史学研究会大会、2009年5月24日、中央大学

(7) 師尾晶子「文字と社会」日本西洋古典学会第60回大会、2009年6月6日、一橋大学

(8) 長谷川岳男、「スパルタにおける公と私-ポリス論再考-」、日本西洋古典学会第60回大会、2009年6月7日、一橋大学

(9) 佐藤昇、「紀元前4世紀アテナイにおける法廷外決着と公共圏」地中海学会定例研究会、2009年12月12日、東京大学

(10) 桜井万里子「古代ギリシアの遺産の継承について-『ブラック・アテナ』の余波のなかで考える」メトロポリタン史学会秋季シンポジウム、2008年11月30日、首都大学東京

(11) 橋場 弦、「ギリシアの「衰退」とは何か 論点開示」日本西洋史学会第58回大会

古代史シンポジウム、2008年5月11日、島根大学

(12) 師尾晶子、「ポリス世界の連続性と展開-エヴェルジェティズムの側面から」、日本西洋史学会第58回大会古代史シンポジウム、2008年5月11日、島根大学

(13) 逸見喜一郎、「教訓詩人個人々の系譜的自己規定、ないしジャンル意識」、日本西洋古典学会第58回大会、2007年6月3日、青山学院大学

(14) Akiko MOROO “How Did People Enjoy Epigraphic Culture in Ancient Greece? Inscrubing Names on Monuments”, 38th International Congress of Asian and North African Studies, 2007年9月、University of Ankara (アンカラ、トルコ)

(15) Akiko MOROO “A Reconstruction of 'the Regulations for Miletos,' IG I(3) 21: Toward Dating to the 420s and Proposing its Historical Context”, 13th International Congress of Greek and Latin Epigraphy (Oxford) 2007年9月、Oxford University (オックスフォード、イングランド)

〔図書〕(計5件)

(1) 桜井万里子・師尾晶子編、山川出版社、『古代地中海世界のダイナミズム』、2010年、全404頁

(2) 桜井万里子・本村凌二、中央公論社、『ギリシアとローマ』、2010年、全549頁

(3) 深沢克己・桜井万里子編、東大出版会、『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史』、2010年、全354頁

(4) 橋場弦、山川出版社『賄賂とアテナイ民主政 美徳から犯罪へ』、2008年、全189頁

(5) 桜井万里子、NHK出版、『いまに生きるギリシア』、2007年、全190頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桜井 万里子 (SAKURAI MARIKO)
東京大学大学院人文社会系研究科名誉教授
研究者番号：90011329

(2) 研究分担者

橋場 弦 (HASHIBA YUZURU)

東京大学大学院人文社会系研究科教授
研究者番号：10212135

師尾 晶子 (MOROO AKIKO)
千葉商科大学、商経学部、教授
研究者番号：10296329

長谷川 岳男 (HASEGAWA TAKEO)
鎌倉女子大学、教育学部、教授
研究者番号：20308331

佐藤 昇 (SATO NOBORU)
東京大学大学院人文社会系研究科助教
研究者番号：50548667
(2009年度より)

逸身 喜一郎 (ITSUMI KIICHIRO)
東京大学大学院人文社会系研究科教授
研究者番号：40107420
(2007年度まで)